

# 「女々しい男」は罪か？

—古代ギリシャ・ローマの文化における ΜΑΛΑΚΟΣ (I コリント 6:9)—<sup>1</sup>

小 林 昭 博

## 1. はじめに

I コリント 6:9-10 の悪徳表において、十の悪徳の一つとして列挙されている μαλακοί (単数形 μαλακός) は、文語訳、口語訳、新共同訳、フランシスコ会訳、青野太潮訳といった従来の日本語訳聖書において、「男娼」という訳語を充てられてきた。また、西洋語訳聖書では、*NRSV* が「男娼たち」(male prostitutes)、*CSB (NAB)* が「少年男娼たち」(boy prostitutes)、チューリヒ聖書とドイツ語共同訳が「稚児たち」(Lustknaben) との訳語を充てている<sup>2</sup>。確かに、μαλακός を「男娼」や「稚児」といった同性間性交の「受け手」の意味に理解すれば、この悪徳表において、μαλακοί と ἀρσενικοῖται (男と寝る男たち)

1 本論文は、2007年11月30日に関西学院大学大学院神学研究科に提出し、2008年2月27日に受理された、博士学位論文『同性愛と新約聖書——セックス・ジェンダー・権力構造』の第7章第1節「ΜΑΛΑΚΟΣ——I コリント 6:9」を、表記のように題を変更した上で、大幅に加筆および削除の手を入れて修正したものである。なお、博士論文——したがって本論文——は、2007年5月25日に行われた関西学院大学キリスト教と文化研究センター研究プロジェクト「聖典と今日の課題」2007年度第1回研究会において、『『聖書に書いてあるから』というのが本当の理由なのだろうか？——同性愛を罪とする聖書テキストを読む』と題する研究発表に遡源するものである。

2 *RSV* は、1946年版では「同性愛者たち」(homosexuals)、1971年版では「性的倒錯者たち」(sexual pervers)、*NEB* は「同性愛的倒錯の罪にある者」(who are guilty of homosexual perversion)、*REB* は「性的倒錯者」(sexual pervert)、*La Bible en français courant* は「少年愛者たち」(pédérastes) と訳しているのだが、これらの翻訳は μαλακοί と ἀρσενικοῖται の両語を「同性愛」の「受け手」と「挿し手」と見なすことによって、この両語を一語に括するという極めて粗雑な翻訳をしている。

の二語が、同性間性交の「受け手」と「挿し手」を意味しているとの解釈の正当性を保証しているかに思える<sup>3</sup>。だが、μαλακόςには「男娼」や「稚児」といった意味などなく、同性間性交の「受け手」としての用例もない<sup>4</sup>。にもかかわらず、I コリント 6:9 の μαλακοί が同性間性交の「受け手」の意味に理解されてきたのはどうしてだろうか。そこで、本論文では、ギリシャ・ローマの文化

3 I コリント 6:9 の ἀρσενοκοῖται に関しては、拙論「男と男が寝るのは罪か?——コリント 6:9 における ΑΡΣΕΝΟΚΟΙΤΑΙ」『神学研究』関西学院大学神学研究会、54 号、2007 年、15-29 頁、および博士論文の第 7 章第 2 節を参照。

4 Dale B. Martin, *Arsenokoitês and Malakos: Meanings and Consequences*, in: Robert L. Brawley (ed.), *Biblical Ethics and Homosexuality: Listening to Scripture*, Louisville: Westminster John Knox Press, 1999, [117-136] 124-128, 134f. = idem, *Sex and the Single Savior: Gender and Sexuality in Biblical Interpretation*, Louisville: Westminster John Knox Press, 2006, 43-47, 204f.; 田川建三『新約聖書 訳と註 3——パウロ書簡その一』作品社、2007 年、275-276 頁参照。

古典ギリシャ語辞典の LSJ, 1076f. を見る限りは、μαλακός には「男娼」や「稚児」といった「受け手」の意味および用例はない。しかし、新約聖書ギリシャ語辞典の BA, 991 を見ると、本来は「柔らかな」という意味だと説明しておきながら、何の説明を加えることもなく「稚児」(Lustknaben) を意味すると断定しており、同性間性交 (少年愛) にたいする先入観に基づく著しい論理の飛躍がある。また、VGT, 387 は、前 245 年頃の P. Hib. (ヒバー・パピルス) I, 54, 11 が「女々しい男ゼノビオス」(Ζηινόβιον τὸν μαλακόν) なる男性に言及するテキストを例示し、この用例が I コリント 6:9 と同じ意味としてではなく、ゼノビオスの踊る姿が単に ὁ μαλακός だと言及されているとの説明を加えている。とすると、この用例は μαλακός が同性間性交の「受け手」を表す語ではないことの証左として、実は極めて重要であり、そこで比較参照されているラテン語のテキストが「女々しいキナエドゥス」(cinaedus malacus) に言及していることを考えると (プラウトゥス『ほらふき兵士』668)、VGT が P. Hib. I, 54, 11 の μαλακός を同性間性交の意味としてではなく、ジェンダーの逸脱の問題として正確に理解していることが窺われる。だが、残念なことに、VGT は、BA 同様——BA も P. Hib. I, 54, 11 とプラウトゥス『ほらふき兵士』668 を例示している——、I コリント 6:9 の μαλακοί を従来の新約聖書の訳語を無批判に前提することによって、パピルスから重要な用例を引いてきたにもかかわらず、その用例を語義決定のために役立てるといふ基本をないがしろにしている。なお、Marti Nissinen, *Homoeroticism in the Biblical World: A Historical Perspective*, English translation from Finnish by Kirsi Stjerna, Minneapolis: Fortress Press, 1998, 117 は、P. Hib. I, 54, 11 とプラウトゥス『ほらふき兵士』668 で用いられている μαλακός/malacus が、「少年男娼」を意味するのではなく、そこに登場する男性の踊る姿や容姿が女性的であることに言及していると正確に捉えている。ただし、ニッシネンは、κίναιδος/cinaedus の語を「少年男娼」の意味だと指摘しており、この点については、彼は κίναιδος/cinaedus がジェンダーの逸脱を意味する語であることを見落としてしまっている (この点に関する詳細は、博士論文の第 4 章第 2 節注 63 を参照)。

に *μαλακός* を位置づけることによって、このような誤読が生じた原因を明らかにし、Ⅰコリント 6:9 の *μαλακοί* が指し示す人物像を浮かび上がらせてみたいのである。

## 2. 古代ギリシャの同性間性交（少年愛）における「受け手」

古代のギリシャでは、同性間性交における「挿し手／能動者／支配者」を「恋愛する者」(*ἐραστής*) と呼び<sup>5</sup>、「受け手／受動者／屈服者」を「恋愛される者」(*ἐρώμενος*) と呼んでいた<sup>6</sup>。この両語は、「ギリシャ的愛」として知られる古代ギリシャの「少年愛」(*παιδεραστία*) において用いられたものであり、年少者の「少年」ないし「若者」に「恋愛する」(*ἐρᾶν*) 年長者の「成人男性」(*ἀνὴρ*) を *ἐραστής* と呼び、年長者の「成人男性」に「恋愛される」(*ἐρασθαι*) 年少者の「少年」(*παῖς*)<sup>7</sup> ないし「若者」(*νεανίας*／*νεανισκός*)<sup>8</sup> を *ἐρώμενος* と呼んだのである。また、「少年に関わる／少年に属する」を意味する形容詞 *παιδικός* の中性複数形 *παιδικά* を、あたかも男性単数形の如くに使い、*ἐρώμενος* と同じ意味を持たせ、「稚児」の意味で用いていたことも知られている<sup>9</sup>。したがって、「恋愛される者」と「稚児」という二語が、古代ギリシャの少年愛における通常の「受け手」である「少年」ないし「若者」を表すギリシャ語である<sup>10</sup>。

5 プラトン『饗宴』179e-180b; 183c-184a; 同『パイドロス』232ab; 255d; 同『エウテュデモス』282b; アリストパネス『福の神』15, 3-9; アISKINEΣ『ティマルコス告発』135; プルタルコス『愛をめぐる対話』762c; 同『アルキビアデス伝』4, 5-6.

6 プラトン『饗宴』179e-180b; 183c-184a; 同『パイドロス』232ab; 255d; アリストパネス『福の神』15, 3-9; アISKINEΣ『ティマルコス告発』135; クセノポン『アナバシス』5, 8, 4.

7 プラトン『法律』840a; 同『カルミデス』154b; 同『プロタゴラス』309a; クセノポン『アナバシス』4, 1, 14; 7, 4, 7.

8 プラトン『カルミデス』154a-c; 同『エウテュデモス』273a; 275ac; 同『リュシス』205 bc.

9 クセノポン『家政論』12, 13-14; 同『アナバシス』2, 6, 6; 同『ソクラテスの思い出』2, 1, 24.

10 「少年」や「若者」以外にも、古代ギリシャ・ローマ世界では、「男娼」(*πόρνος*／*scortum*) や「男性奴隸」(*δοῦλος*／*servus*／*puer*) もまた同性間性交の「受け手」にされていたということにも留意しなくてはならない。なお、*πόρνος* の語が「男娼」の意に理

### 3. セクシュアリティの観点からジェンダーの観点へ——認識の修正

#### 3.1. 「柔らかな者」「柔弱な者」「女々しい男」「男らしくない男」

形容詞 *μαλακός* は「柔らかな」が原意である<sup>11</sup>。したがって、I コリント 6:9 の *μαλακοί* を直訳すると、「柔らかな男たち」「柔らかな者たち」となる。そして、実際に *μαλακοί* を端的に直訳する翻訳も存在する。代表的なのは古代訳のラテン語訳ウルガータであり、*molles*（柔らかな者たち）と直訳している。ラテン語の形容詞 *mollis* は、「柔らかな」という原意だけではなく<sup>12</sup>、「女々しい」「男らしくない」という意味にも用いられる語である<sup>13</sup>。また、ドイツ語訳のルター訳も「柔弱な者たち」「女々しい者たち」を意味する *die Weichlinge* という訳語を充てており、英語訳の *KJV (AV)* は「女々しい者」(*effeminate*)、フランス語訳の *TOB* も「女々しい者たち」(*les efféminés*) との訳語を充てている。さらに、最新の日本語訳である田川建三訳は、「柔弱な者」との訳語を充て、上述した *P. Hib.*にも言及しつつ、*μαλακός* が同性間性交の「受け手」を指す語ではなく、「単にその男が『柔弱な者』だと言われているだけのことであり」と指摘している<sup>14</sup>。したがって、これらの翻訳は、I コリント 6:9 の *μαλακοί* を「柔らかな者」「柔弱な者」「女々しい男」「男らしくない男」といったジェンダーに関する表現として理解しているのである。

#### 3.2. 誤読の原因——セクシュアリティの観点の導入による誤読

このような I コリント 6:9 の *μαλακοί* の翻訳が辿った二つの歴史を眺めてみると、*μαλακός* をセクシュアリティの観点で理解するか、ジェンダーの観点で理解するかという認識上の決定的な相違の存在に気づかされる。ここで想起す

解されてこなかったことも、*μαλακός* が「男娼」と誤訳されてきた一因である。

11 LSJ, 1076f.

12 大ブリニウス『博物誌』13, 82; オウィディウス『変身物語』1, 20; 2, 577.

13 プラウトゥス『ほらふき兵士』668; オウィディウス『変身物語』3, 547.

14 田川『新約聖書 訳と註 3』36、275–276頁（引用は 276 頁）。なお、上注 4 を参照。

べきことは、セクシュアリティが十九世紀に出現した「装置」(dispositif) ないし「文化的構築物」(cultural construction) だということである<sup>15</sup>。つまり、古代訳のウルガータ、宗教改革期に遡るルター訳、そして 1611 年発行の *KJV* (AV) は、セクシュアリティの出現以前の翻訳であり、むしろそこにセクシュアリティの観点が入り込む余地がないのにたいして、「受け手」の意味に理解するのはセクシュアリティ出現以降の現代の翻訳だということである。そして、このようにジェンダーからセクシュアリティへの観点の転換、すなわちセクシュアリティの観点に基づく誤読を促したのは、田川建三によると、特にアドルフ・ダイスマンによって<sup>16</sup>、上述した P. Hib. I, 54,11 の ὁ μαλακός が引き合いに出され、μαλακοί と ἀρσενοκοῖται の二語が同性間性交の「受け手」と「挿し手」を指すと解されるようになったことが強く影響しているのである<sup>17</sup>。したがって、I コリント 6:9 の μαλακοί が同性間性交の「受け手」を指すと誤読されるようになった原因は、十九世紀にセクシュアリティが出現したことによって、新約聖書学者やキリスト教史学者たちもまた、セクシュアリティの観点を無自覚に持ち込んでしまったことにある。

### 3.3. セクシュアリティの呪縛——セクシュアリティの観点に基づく誤読

このような誤読は、ドイツ語圏の重要な注解書においても広く認められ、ハンス・リーツマン、ハンス・コンツェルマン、ヴォルフガング・シュラーゲ、ヘルムート・メルクラインといった学者は、ルター訳に倣って *Weichlinge* と訳してはいるのだが、注解を施す段になると、リーツマンとコンツェルマンは「受け手」と解し、シュラーゲは「稚児」ないし「男娼」と理解し、メルクラインは「稚児」の意味だとして、少年愛の「受け手」を指すと説明しているの

15 この点については、博士論文の第 2 章で詳論した。

16 Adolf Deißmann, *Licht vom Osten. Das Neue Testament und die neuentdeckten Texte der hellenistisch-römischen Welt*, Tübingen: Mohr-Siebeck, 1923, 131 n. 4 und 269.

17 田川『新約聖書 訳と註 3』275-276 頁。なお、ダイスマンの影響の一例をあげると、ハンス・リーツマン (Hans Lietzmann/Werner Georg Kümmel, *An die Korinther I-II*, HNT 9, Tübingen: Mohr-Siebeck, 1949, 27) が、ダイスマンに依拠して、μαλακός は ἀρσενοκοίτης の「受け手」だと断言している。

である<sup>18</sup>。これらの極めて優れた新約聖書学者が、μαλακοίを正確に Weichlinge と翻訳しているにもかかわらず、自分が充てた訳語を忘れ去り、何の矛盾も感ずることなく、「受け手」「稚児」「男娼」の意味だと説明しているのは、彼らがセクシュアリティの観点を無意識に持ち込んでしまっているためである。

また、「同性愛と新約聖書」に関する最重要の研究を著しているロビン・スクロッグスにしても、μαλακόςが「女々しい」を意味することを重々承知しているにもかかわらず、μαλακόςを effeminate call-boy (女々しい男娼／女性的な男娼) の意味だとしている<sup>19</sup>。同様の理解は、セクシュアリティ研究の知見に依拠し、当時の地中海世界のなかにパウロのセクシュアルなメンタリティを位置づけているヴォルフガング・シュテーターゲマンにも確認される。シュテーターゲマンは、ジェンダーの観点から μαλακός が長い髪や化粧で身を飾る女性的な特徴を持つ「女々しい男」を意味すると指摘しつつも、それだけでは満足できずに、スクロッグスに拠りながら、セクシュアリティの観点を無意識に持ち込み、μαλακός が少年愛の「受け手」や「男娼」を表す語であると誤読しているのである<sup>20</sup>。そして、このような誤読は現在の学者の間にも蔓延しており、大部分の聖書学者やキリスト教神学者は、本質主義的なセクシュアリティの呪縛に捕らわれているがゆえに、殆ど議論することも、疑いを差し挟むこともなく、半ば機械的に μαλακός を「受け手」「男娼」「少年男娼」「稚児」の意味に理解している<sup>21</sup>。

18 Lietzmann/Kümmel, *An die Korinther I-II*, 26f.; Hans Conzelmann, *Der erste Brief an die Korinther*, KEK V, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, <sup>12</sup>1981, 132, 135f.; Wolfgang Schrage, *Der erste Brief an die Korinther I (1 Kor 1, 1-6, 11)*, EKK VII/1, Zürich/Braunschweig: Benziger Verlag und Neukirchen-Vluyn: Neukirchner Verlag, 1991, 426, 431f.; Helmut Merkley, *Der erste Brief an die Korinther 2. Kapitel 5, 1-11, 1*, ÖTKNT 7/2, GTB 512, Gütersloh: Gütersloher Verlagshaus und Würzburg: Echter Verlag, 2000, 48, 62f.

19 Robin Scroggs, *The New Testament and Homosexuality: Contextual Background for Contemporary Debate*, Philadelphia: Fortress Press, 1983, 101-109.

20 Wolfgang Stegemann, Paul and the Sexual Mentality of His World, *BTB* 23, 1993, [161-166] 164.

21 Derrick Sherwin Bailey, *Homosexuality and the Western Christian Tradition*, New York/London: Longmans, Green, 1955, 38; Else Kähler, Exegese zweier neutestamentlicher Stellen (Römer 1, 18-32; 1. Korinther 6, 9-11), in: Theodor Bovet (Hg.), *Probleme der Homophilie in*

### 3.4. セクシュアリティの観点からジェンダーの観点へ——認識の修正

だが、最近になって漸くセクシュアリティの観点を持ち込むことに疑いを差し挟む研究が公にされるようになってきた。ベルナデット・J・ブルーテンは、*μυλακοί* を同性間性交における「受け手」の意味だけではなく、同性間性交とは無関係である可能性をも考慮に入れており<sup>22</sup>、クリスティン・E・グドルフ

---

*medizinischer, theologischer und juristischer Sicht*, Bern: Paul Haupt und Tübingen: Katzmann, 1965, [12–43] 32–35; Charles K. Barrett, *A Commentary on the First Epistle to the Corinthians*, BNTC, London: Black, 1971, 134, 140; 山谷省吾『コリント人への第一の手紙——パウロ書簡・新訳と解釈』新教出版社、1970年、109–110頁、Erich Fascher, *Der erste Brief des Paulus an die Korinther I. Einführung und Auslegung der Kapitel 1–7*, ThHKNT VII/I, Berlin: Evangelische Verlagsanstalt, 1980, 169, 172; Tom Horner, *Jonathan Loved David: Homosexuality in Biblical Times*, Philadelphia: The Westminster Press, 1978, 97; Victor Paul Furnish, *The Moral Teaching of Paul: Selected Issues*, Nashville: Abingdon Press, 1979, 1985, 67–72, esp. 68; Ronald M. Springett, *Homosexuality in the History and the Scriptures: Some Historical and Biblical Perspectives on Homosexuality*, Washington, D.C.: Biblical Research Institute, 1988, 133–137; Georg Strecker, Homosexualität in biblischer Sicht, *KD* 28, 1982, [127–141] 135f.; Jürgen Becker, Zum Problem der Homosexualität in der Bibel, *ZEE* 31, 1987, [36–59] 50f.; Gordon D. Fee, *The First Epistle to the Corinthians*, NICNT, Grand Rapids: Eerdmans, 1987, 239, 243f.; August Strobel, *Der erste Brief an die Korinther*, ZBK 6/1, Zürich: Theologischer Verlag, 1989, 105, 109; Eva Cantarella, *Bisexuality in the Ancient World*, Translation from Italian by Cormac Ó Cuilleaináin, New Heaven: Yale University Press, 1992, with a preface to second edition, 2002, 191–194; 青野太潮訳『パウロ書簡』（新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』Ⅳ）岩波書店、1996年、79頁、Richard B. Hays, *The Moral Vision of the New Testament: Community, Cross, New Creation. Contemporary Introduction to the New Testament Ethics*, San Francisco: HarperSanFrancisco, 1996, 382f.; Christian Wolff, *Der erste Brief des Paulus an die Korinther*, ThHKNT 7, Leipzig: Evangelische Verlagsanstalt, 1996, 112, 118, 119f.; Donald J. Wold, *Out of Order: Homosexuality in the Bible and the Ancient Near East*, Grand Rapids: Baker Books, 1998, 189–192; Raymond F. Collins, *First Corinthians*, SP 7, Collegeville: The Liturgical Press, 1999, 225, 230, 236; William R. Schoedel, Same-Sex Eros: Paul and the Greco-Roman Tradition, in: David L. Balch (ed.), *Homosexuality, Science, and the “Plain Sense” of Scripture*, Grand Rapids/Cambridge: Eerdmans, 2000, [43–72] 63; James B. De Young, *Homosexuality: Contemporary Claims Examined in Light of the Bible and Other Ancient Literature and Law*, Grand Rapids: Kregel Publications, 2000, 175–203; William J. Webb, *Slaves, Women and Homosexuals: Exploring the Hermeneutics of Cultural Analysis*, Foreword by Darrell L. Bock, Downers Grove, Illinois: InterVarsity Press, 2001, 193; Robert A. J. Gagnon, *The Bible and Homosexual Practice: Texts and Hermeneutics*, Nashville: Abingdon Press, 2001, 306–312; Philo Thelos, *God Is Not A Homophobe: An Unbiased Look at Homosexuality in the Bible*, Victoria, B.C.: Trafford Publishing, 2004, 72–93.

22 Bernadette J. Brooten, *Love Between Women: Early Christian Responses to Female Homoeroticism*, Chicago Series on Sexuality, History, and Society, Chicago/London: The

は、μαλακόςが「柔らかな」というこの語の基本的な意味から派生した「臆病な者」や「女々しい者」を指す語であるゆえに、μαλακοίがセクシュアルな意味の用例であるかどうかさえ明らかではないと指摘する<sup>23</sup>。同様の見解は、I コリント 6:9 に関して最も詳細な議論を提供するジョン・H・エリオットも示しており、彼はμαλακοίが同性間性交における「受け手」を表すセクシュアルな意味であるのか、「女々しい者」を意味するジェンダーの用語であるのかが定かではない以上、その意味は不確かなままにしておくのが最善だと結論づけている<sup>24</sup>。なお、デイヴィッド・E・フレドリクソンは、μαλακόςには同性間性交の「受け手」の意味も含まれているとしながらも、当時のギリシャ・ローマ世界において、μαλακόςは自己の欲望を抑えることのできない「自制心の欠如した者」というより幅の広い意味合いに受け取られていたとの自説を展開している<sup>25</sup>。

また、これらの研究以上にセクシュアリティの呪縛を解き放ち、より鮮明にジェンダーの観点に基づき、従来の認識を修正する研究も立ち現れている。最重要の研究はデイル・B・マーティンによって著されており、彼は十六世紀から二十世紀にかけて「女々しい者」と訳されてきたμαλακόςが、二十世紀中葉に「受け手」の意味に理解されるようになった理由を、歴史的研究の成果によるのではなく、「セクシュアリティのイデオロギー」(ideology of sexuality/sexual ideology) が転換したからにはほかならないとの重大な指摘をしている<sup>26</sup>。マーティンの指摘は、上述の私見と同じ方向性を示しており、マーティンがセクシュアリティを——構築主義的に<sup>27</sup>——イデオロギーとして捉えている点が

---

University of Chicago Press, 1996, 260, esp. n. 132.

23 Christine E. Gudolf, *The Bible and Science on Sexuality*, Balch (ed.), *Homosexuality, Science, and the "Plain Sense" of Scriptures*, 2000, [121-141] 136.

24 John H. Elliott, *No Kingdom of God for Softies? or, What Was Paul Really Saying? 1 Corinthians 6:9-10 in Context*, *BTB* 34, 2004, [17-40] 23-28, 32-35, esp. 32.

25 David E. Fredrickson, *Natural and Unnatural Use in Roman 1:24-27: Paul and the Philosophic Critique of Eros*, in: Balch (ed.), *Homosexuality, Science, and the "Plain Sense" of Scriptures*, 2000, [197-222] 218-221.

26 Martin, *Arsenokoitês and Malakos*, 124-128 = idem, *Sex and the Single Savior*, 43-47.

27 マーティンの構築主義と本質主義に関する理解については、Martin, *Sex and the Single*



取り分け重要である。すなわち、彼はⅠコリント 6:9 に限らず、ローマ 1:26-27 の解釈においても、研究者たちが純粹無垢に歴史学的に同性間性交の記述を理解しているなどという「神話」を斥け、「異性愛主義」(heterosexism)や「同性愛嫌悪」(homophobia)によって、同性間性交に関する研究が歪められてきたことを白日の下に曝し、「セクシュアリティのイデオロギー」と彼が呼ぶイデオロギーから同性間性交に関する研究を自由に<sup>28</sup>、異性愛主義や同性愛嫌悪のイデオロギーに凝り固まっているアメリカの社会および教会に痛烈な批判を突き付けているのである<sup>29</sup>。

議論を *μαλακός* に戻すと、マーティンは *μαλακός* が「怠惰」「墮落」「頹廢」「勇気の欠如」といった道徳的な非難の用語として用いられている例をあげ、それらが女性の特徴であると見なされていたことを実例として示し、古代社会の男性たちにとって、非男性である女性のこのような特徴は「悪徳」と見なされており、*μαλακός* や *μαλακία* の語が男性に当てはめられるときには、「女々しい者」「女々しさ」を意味し、「悪徳」として理解されていたということを、一次資料を丹念に跡付けつつ、周到に論証している<sup>30</sup>。

マーティン以降では、マルティ・ニッシネンが明瞭にジェンダーの観点に立ち、*μαλακός* が女性の「女らしさ」や男性の「女々しさ」を意味するということを、一次資料によって入念に裏付けており<sup>31</sup>、ジャック・ロジャーズが賛意を示している<sup>32</sup>。さらに、『クイア聖書注解』において、ホリー・E・ハーロンは、*μαλακός* をセクシュアルな意味に理解するのではなく、ジェンダーの観

*Savior*, 201 n. 59, 219f. n. 38 を参照。

28 Martin, *Arsenokoitês and Malakos*, 117-136 = idem, *Sex and the Single Savior*, 37-50; idem, *Heterosexism and the Interpretation of Romans 1:18-32*, *BibInt* 3, 1995, 332-355 = idem, *Sex and the Single Savior*, 51-64 参照。

29 この点に関しては、新免貢「【第一回】講座 今こそ求められる豊かな教師理解——教会再生の秘策を真剣に考える」、新免貢／高橋敬基／岩井健作『この男は罪びとたちを迎えて一緒に食事をしている』関西神学塾、2008年、(5-65 頁) 29-41 頁参照。

30 Martin, *Arsenokoitês and Malakos*, 124-128 = idem, *Sex and the Single Savior*, 43-47.

31 Nissinen, *Homoeroticism in the Biblical World*, 113-118. なお、上注 4 を参照。

32 Jack Rogers, *Jesus, the Bible, and Homosexuality: Explode the Myths, Heal the Church*, Louisville: Westminster John Knox Press, 2006, 73f.

点や道徳的な観点から理解しようと試みている<sup>33</sup>。なお、上述したように、日本では田川建三が μαλακοί を「柔弱な者」と翻訳し、μαλακός が「同性愛」の「受け手」を指すセクシュアリティに関連する用語であるとのダイスマン以降の誤った認識を修正し、ジェンダーの観点から μαλακός を認識し直し、「単にその男が『柔弱な者』だと言われているだけのことである」<sup>34</sup> との重要な指摘をしているということを今一度確認しておきたい。

## 4. 「男らしさ」からの逸脱——「男らしさ」のイデオロギー

### 4.1. 「男らしさ」のイデオロギー——支配と自制

ギリシャ・ローマ世界では、「男らしさ」(ἀνδρεία/virilitas) は「男」(ἀνὴρ/vir) の「美德」であり<sup>35</sup>、「男らしさ」とは「支配」「征服」「強さ」と理解されていた<sup>36</sup>。そして、「男らしさ」は次の二つの面を兼ね備えていなくてはならなかった。すなわち、男は「他者」(女/外国人=奴隷/家)を治め(支配/征服/強さ)、さらに「自己」をも治めねばならない(自制/節制/克己)と考えられていたということである<sup>37</sup>。したがって、ギリシャ・ローマ世界の「男らしさ」のイデオロギーの観点に立脚すれば、μαλακός とは「女々しい男」

33 Holly E. Hearon, 1 and 2 Corinthians, in: Deryn Guest/Robert E. Goss/Mona West/Thomas Bohache (eds.), *The Queer Bible Commentary*, London: SCM Press, 2006, [606–623] 613f.

34 田川『新約聖書 訳と註 3』36、275–276 頁。なお、1974 年の時点で、ポリュカルポスの手紙 5:3 の翻訳において、田川が μαλακοί を「柔弱な者」と正確に翻訳していることは特筆すべきことである。田川建三訳「ポリュカルポスの手紙」、荒井献編『使徒教父文書』(講談社文芸文庫) 講談社、1998 年、(213–226 頁) 218 頁=『使徒教父文書』講談社、1974 年、(145–153 頁) 148 頁参照。

35 ギリシャ・ローマ(ヘレニズム)世界の四大美德は、「知恵」(σοφία)、「男らしさ」(ἀνδρεία)、「節制」(σωφροσύνη)、「正義」(δικαιοσύνη)である。Gottfried Holtz, *Die Pastoralbriefe*, ThHKNT XIII, Berlin: Evangelische Verlagsanstalt, 1980, 40; 高橋敬基「新約聖書釈義 第一テモテ 4——まちがった律法観に対する反対 (1:8–11)」『聖書と教会』日本基督教団出版局、1982 年 4 月号、(36–41 頁) 40 頁注 9 参照。

36 Craig A. Williams, *Roman Homosexuality: Ideologies of Masculinity in Classical Antiquity*, Ideologies of Desire, New York/Oxford: Oxford University Press, 1999, 142f., 160f., 163–167 参照。

37 Williams, *Roman Homosexuality*, 142f., 160f., 163–167 参照。

「男らしくない男」であり、「男らしさ」の対極に位置する「弱い男」「劣った男」として、悪徳や不名誉の典型に位置づけられる存在だったということになる<sup>38</sup>。

#### 4.2. 「男らしさ」のイデオロギーに違反する者

古代ギリシャの少年愛において、「受け手」となる「少年」や「若者」が、「受け手」としての性交において快楽を感じることは「男らしさ」の規則に違反することであり、「男娼」（πόρνος）と見なされ<sup>39</sup>、「女」や「外国人」と同列に扱われ、そのような事実や過去が露見した場合、その者は男性市民としての諸権利を剥奪されたことが知られている<sup>40</sup>。また、古代ローマの同性間性交において、「受け手」となる男性は、「男らしさ」のイデオロギーを破棄する者として、「キナエドゥス」（cinaedus）や「女」と同様に扱われ、罵詈雑言を浴びせられたことも知られている<sup>41</sup>。三つテキストを引用する。

というのは、少年は性のいとなみの際、女のように男と快楽を共にすることもなく、性に酔い痴れた相手を醒めた眼で眺めているからである<sup>42</sup>。

カリグラは自分の純潔も他人の純潔も、いっこうに大切にしなかった。  
マルクス・レピドゥスと默劇俳優ムネステルと、そして何人かの人質を愛

38 Williams, *Roman Homosexuality*, 127–132, 154–159, 211–215 et. al. 参照。

39 ただし、実体に目を向けると、「男娼」は「奴隷商人」によって売買され、売春させられていたのであって、快楽を感じていたわけではない。男娼や娼婦にたいするこの種の社会的蔑視に基づく偏見は、いつの時代にも見られる悲しい現実である。

40 用例も含めて、ケネス・J・ドーヴァー『古代ギリシアの同性愛』中務哲郎／下田立行訳、リプロボート、1984年、133頁（Kenneth J. Dover, *Greek Homosexuality*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1978, updated and with a new postscript, 1989, 103）参照。なお、アイスキネス『ティマルコス告発』は、まさにこの点の問題をめぐる議論を展開する書物である。

41 用例も含めて、Williams, *Roman Homosexuality*, 186f. 参照。

42 クセノポン『饗宴』8, 31. 訳文は、ドーヴァー『古代ギリシアの同性愛』68頁による。

し、お互いに体を汚しあったと言われる。執政官級の家柄の若者ウェアリウス・カトゥルスは、「カリグラは私を辱めた。私の腰は、彼と一緒にねて、くたくたに疲れた」と言いふらした<sup>43</sup>。

最後に解放奴隷ドリュポルスによって仕上げがなされた。この者に、ちょうどスポルスがネロに嫁いだように、今度はネロが嫁ぎ、暴行されている処女の叫びや悲鳴をまねた<sup>44</sup>。

一番目の引用は、「女のように快楽を共にすることもなく」という描写から、少年が「男らしさ」および「自制／節制」の美德に従い、古代ギリシャの少年愛において「受け手」が本来あるべき正しい姿を記しているのだが、「挿し手の男性」と「受け手の少年」との間の温度差を見事に描写するテキストでもある。二番目の引用は、カリグラ（ガイウス）に関するものであり、ローマ皇帝であるカリグラが同性間性交において「受け手」になったことを問題としており、さらにはカトゥルスが「カリグラは私を辱めた」と嘆いているように、ローマの自由人男性を「受け手」にさせたことが非難の対象となっている。三番目のネロに関する引用は、ローマ皇帝ネロが、「花嫁」となり、暴行されて屈服することに快楽を感じている様子を「悪徳」の典型として叙述するテキストである。

#### 4.3. 「男らしさ」からの逸脱——フィロン『アブラハム』135-136

ここで、μαλακόςに議論を戻し、μαλακόςが「男らしさ」からの逸脱を表すジェンダーに関する用語であるということの証左として、フィロン『アブラハム』135-136のテキストを引用する。

43 スエトニウス『カリグラ』36. 引用は、スエトニウス『ローマ皇帝伝（下）』（岩波文庫）国原吉之助訳、岩波書店、1986年、50頁による。

44 スエトニウス『ネロ』29. 引用は、スエトニウス『ローマ皇帝伝（下）』（国原訳）164頁による。

135……なぜなら、彼ら〔＝ソドム人男性たち〕はその女狂いによって他人の結婚を腐敗させただけでなく、男であるにもかかわらず男性に馬乗りになり、受け手側に挿し手側が向かう〔ことで成り立つ〕寢床〔＝性交〕の自然を畏敬することがなかったので、彼らが子をもうけようとして種を撒き散らしたときに、彼らは自分たちの子作りが不毛だということを悟らせられたのだが、しかしその悟りも何ひとつ役に立つこともなく、より激的な欲望によって彼らは制圧されてしまったのである。136 その後、少しずつ、彼らは男として生まれた者たちを女の属性である屈服することによって、彼ら〔＝男たち〕に克服し得ない邪悪な女性の病気を備え付け、その身を女々しさ〔＝柔弱さ〕とか弱さ〔＝微弱さ〕とによって女性化しただけではなく、さらにその魂をより一層卑しく〔なるように〕仕立て上げ、そして、実際に自分たちの上に〔腐敗の〕一部を来たらせ〔ただけではなく〕、人類の子孫全体を〔も〕腐敗させたのである。……<sup>45</sup>。

『アブラハム』135-136は、ソドムの男性たちの同性間性交に言及するテキストとして知られているが、瞠目すべき点は、フィロンがソドムの同性間性交を同性間性交そのものの問題として取り上げているようでありながら、実際には、同性間性交が本来女性の役割である「受け手」の役割を男性にさせてしまっていることを問題視している点にある。引用の前半の『アブラハム』135を一瞥すると、フィロンは「受け手＝女性」と「挿し手＝男性」によって成り立つのが「寢床〔＝性交〕の自然」であるとの理解を示し、生殖を伴わないがゆえに同性間性交を問題視しているように見受けられる。だが、引用の後半に当たる『アブラハム』136では、同性間性交において「受け手」とされた男たちが、女のように屈服させられることによって、女性の病気に罹って「女々し

45 引用は、Francis Henry Colson (ed.), *Philo VI: De Abrahamo, De Ioseph, De Vita Mosis I et II*, LCL 289, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1994 (=1935), 70 のギリシャ語テキストに基づいて私訳した。

く」なっている状態を問題視しているのである。すなわち、同性間性交において、「受け手」となる男が「女々しく」されてしまっていることをこそ、フィロンが問題視しているということが看取されるということである。

議論を *μαλακός* に戻すと、「その身を女々しさ [= 柔弱さ] とか弱さ [= 微弱さ] とによって女性化した」(*τὰ σώματα μαλακότητι καὶ θρύψει γυναικοῦντες*) という文面において、フィロンは *μαλακός* の関連語である *μαλακότης* を用いている。私訳では *μαλακότητι* を「女々しさ [= 柔弱さ]」と訳したのだが、「か弱さ [= 微弱さ]」と訳した *θρύψει* と対で用いられ、「女々しさ (柔弱さ)」と「か弱さ (微弱さ)」が、男を「女性化した」(*γυναικοῦντες*) 原因として描写されている。このテキストにおいて、フィロンは、本来「男らしく」あるべき男性が同性間性交において「屈服」させられ、「受け手」とされてしまっている状態を、*μαλακότης* と *θρύψις* の二語によって同語反復的に「柔弱さ」「女々しさ」の意味で叙述しているものと考えられる<sup>46</sup>。

上述した *μαλακός* の用例から考えると、*μαλακότης* は「贅沢さ」「頹廢」および「自制心の欠如」といった精神的な「柔弱さ」「女々しさ」を問題にしていると見ていいだろう<sup>47</sup>。そして、*θρύψις* は「粉々にすること」「小さな断片にすること」という語義から推し量ると<sup>48</sup>、「屈服」に象徴される「弱さ」「女々しさ」を言い表し、肉体的な「か弱さ」「微弱さ」「弱小さ」を問題にしていると考えられる。この推論を上述したギリシャ・ローマ世界の「男らしさ」のイデオロギーに当てはめると、*θρύψις* は「他者」を治める意味での「男らしさ」(支配／征服／強さ)に反する「女々しさ」を表し、*μαλακότης* は「自己」を治める意味での「男らしさ」(節制／自制)に反する「女々しさ」を示し、「支配と自制」という「他者と自己」を治めることで成り立つギリシャ・ローマ世界の「男らしさ」に反する「女々しさ」を、フィロンは *μαλακότης* と *θρύψις* の二語を重ねることによって、強調しているということが炙り出されてくるのであ

46 両語義については、LSJ, 1077 (s. v. *μαλακότης*), 808 (s. v. *θρύψις*) を参照。

47 新約聖書における *μαλακός* (マタイ 11:8／ルカ 7:25) と *μαλακία* (マタイ 4:23, 9:35, 10:1) の用例を参照。これらの用例については、博士論文の第7章第1節で詳論した。

48 LSJ, 808 (s. v. *θρύψις*), 807 (s. v. *θρύπτω*) 参照。

る。

#### 4.4. 女の病気——ジェンダーの逸脱

上述した『アブラハム』136において、フィロンは「女々しさ」と「か弱さ」とによって「女性化した」男たちが、「克服し得ない邪悪な女性の病気」に罹っているとの非難を表明している。男の「女々しさ」(μαλακότης)や「女性化」(γυναικώ)、すなわち「ジェンダーの逸脱」を「病気」に喩えるのは、ギリシャ・ローマ世界では普通に確認されることである<sup>49</sup>。下記に引用する(偽)アリストテレス『問題集』の用例は、フィロンと並んで最重要のテキストである。

生まれつき女性的な者たちは……自然に反した身体づくりである。なぜなら、彼らは男性であるのに、この部分(直腸)が必ずや欠陥のあるものにされるようにできているからである。欠陥が全きものだと破壊を惹きおこし、そうでない場合は(その人の本性の)ねじまげを引きおこす。しかし、前者のようなことは(今考察している事柄においては)起こらない。というのは、(もしそれが起これば)その男は女になってしまうであろうから。従って必然的に、彼らはねじまげられることになり、精液分泌のためのどこか別の場所で衝動を感じざるをえないのである。それ故彼らは、女たちと同様、飽くことを知らない。それは液の量が少く、力づくで外部に出ていくほどでなく、すみやかに冷えるからである<sup>50</sup>。

この一文は「生まれつき μαλακοί は」とはっきりと断っている重要なテキストであり<sup>51</sup>、μαλακοί が同性間での肛門性交において、「女たちと同様、飽くこ

49 ユウエナリス『諷刺詩』2, 17. 50. 詳しい用例は、Williams, *Roman Homosexuality*, 180 f., 339 n. 126–129 参照。

50 (偽)アリストテレス『問題集』4, 26. 訳文は、ドーヴァー『古代ギリシアの同性愛』217 頁による。

51 日本語訳が「生まれつき女性的な者たち」と訳出しているように(ドーヴァー『古

とを知らない」快樂の虜になっているということを指摘している。要するに、「節制／自制」を美德とする「男らしさ」とは対照的に、女というのは「自制心」が欠如しているために、「飽くことを知らない」快樂に溺れる存在であるという酷い女性差別を大前提に据え、μαλακοίとは「自然に反した身体づくり」を持ち、「この部分（直腸）が必ずや欠陥のあるもの」だと比喩的に指摘し、μαλακοίが「女たちと同様」になってしまっていることを揶揄しているのである。そして、その点を指摘するのが「(その人の本性の) ねじまげ」「彼らはねじまげられることになり」という文面であり、本来「男らしく」あるべき男が「女ようになってしまっている有り様」——このような有り様をフィロンはμαλακότηςと呼ぶ！——を「ねじまげ」（倒錯）と呼ぶことによって、「ジェンダーの逸脱」をμαλακοίの語によって問題視しているということである。

## 5. まとめ——古代ギリシャ・ローマの文化におけるΜΑΛΑΚΟΣ

### 5.1. 「女々しい男」——「男らしさ」のジェンダーからの逸脱

以上の考察の結果を踏まえれば、μαλακότηςは男女双方の「女々しさ」を表し、μαλακόςは「女々しい男」を意味するということが理解できるのである。むしろ、結果としてμαλακόςが同性間性交の「受け手」になることもあったのだが、それはジェンダーの逸脱から派生した二次的なことであり、ここには男性同性愛者（セクシュアリティの観点）とトランスジェンダー（ジェンダーの観点）とを混同し、「男性同性愛者って心が女性なんでしょ?」「トランスジェンダーって同性愛者なんでしょ?」と考える偏見や誤解と同様のジェンダーとセクシュアリティの混同の問題がある<sup>52</sup>。したがって、I コリント 6:9 に登場

代ギリシアの同性愛』217 頁)、原著では *Those who are effeminate by nature* と英語訳されており (Dover, *Greek Homosexuality*, 169)、ドーヴァーがμαλακοίを「女々しい男」「女々しい者」の意味に理解していることが窺われる。

52 マーティンは、「簡単に言えば、挿入されるすべての男たちは malakoi であったが、しかしすべての malakoi が挿入される男たちではなかった」(Martin, *Arsenokoitês and Malakos*, 125 = idem, *Sex and the Single Savior*, 45) と意味深長に述べ、μαλακόςが同性間性交における「受け手」そのものを表すわけではなく、「女々しさ」(effeminacy) という



する μαλακοί とは、「男らしさ」のイデオロギーに違反し、ジェンダーを逸脱する「女々しい男」「男らしくない男」の総称であり、具体的には、「身体的に《女性的な男》」「心理的・精神的に《女性的な男》」「化粧や服装の面で《女性的な男》」「仕草や振る舞いが《女性的な男》」「同性間性交において《女性的な男》」のことを言い表していると結論づけられるのである。

## 5.2. 「女々しい男」は罪か？

このような μαλακός が指し示す人物像を現代的な言葉に置き換えると、「トランスジェンダー」(transgender) になるであろうか。あるいは、μαλακός に含まれる差別的な意味合いを勘案すると、「女々しい男」の蔑称である「オカマ」、もしくは英語の「クイア」(queer) になるかもしれない<sup>53</sup>。このような蔑称が物語っているように、「女々しい男」にたいする蔑視は、現代社会にも通底する差別的価値観である。とはいえ、「女々しさ」ゆえに「女々しい男」を悪徳表に入れ、同じ手紙において、「神の国を受け継ぐことはないであろう」(I コリント 6:9a, 10b) と十の悪徳を挟み込む形で、二度も断罪するパウロが、わたしたちには却って「奇妙」(queer) に映ずるかもしれない。

だが、同じ手紙の結びで、「目覚めておれ、信仰において立て、男らしくあれ (ἀνδρίζεσθε)、力強くあれ」(I コリント 16:13) と命じるパウロが、古代ギリシャ・ローマ世界の「男らしさ」(ἀνδρεία) のイデオロギーの体现者であったことは疑う余地がない。上記で明らかにしたように、古代ギリシャ・ローマの文化では、「女々しさ」は軽蔑と嘲笑の対象であるばかりではなく、「男らしさ」の「美德」に違反する「悪徳」でもあった。これらの価値観の背景には、<sup>ミソジニー</sup>「女性嫌悪」や「女性蔑視」が横たわっていると考えられるが、このようなパ

---

ジェンダーを表す用語であるということを強調している。ただし、より厳密に定義すれば、「受け手」がすべて μαλακός だったわけではなく、女のように「受け手」であることに喜びを見出し、快楽を感じる者が、「ジェンダーを逸脱する者」として、μαλακός / malacus や κίμαιδος / cinaedus と呼ばれたのである。

53 『クイア聖書注解』において、ハーロンは「現代用語では、わたしたちは malakoi をメトロセクシュアルと翻訳できるかも知れない」(Hearon, 1 and 2 Corinthians, 613) と指摘しているが、μαλακός の語の意味の一端を捉えていると言えるであろう。

ウロの「《男らしさ》のイデオロギー」や「《男らしさ》のジェンダー」の価値観を受け継ぐことはできないし、本論文題にたいする答えとして、「女々しい男」は罪ではないということを付言しておきたい<sup>54</sup>。

---

54 なお、本論文はIコリント6:9のμαλακοίの語義に焦点を当てたものであり、紙幅の関係上、Iコリント6:9-10の悪徳表におけるμαλακοίの位置づけ等については言及しなかった。この点の問題については、博士論文の第7章を参照されたい。